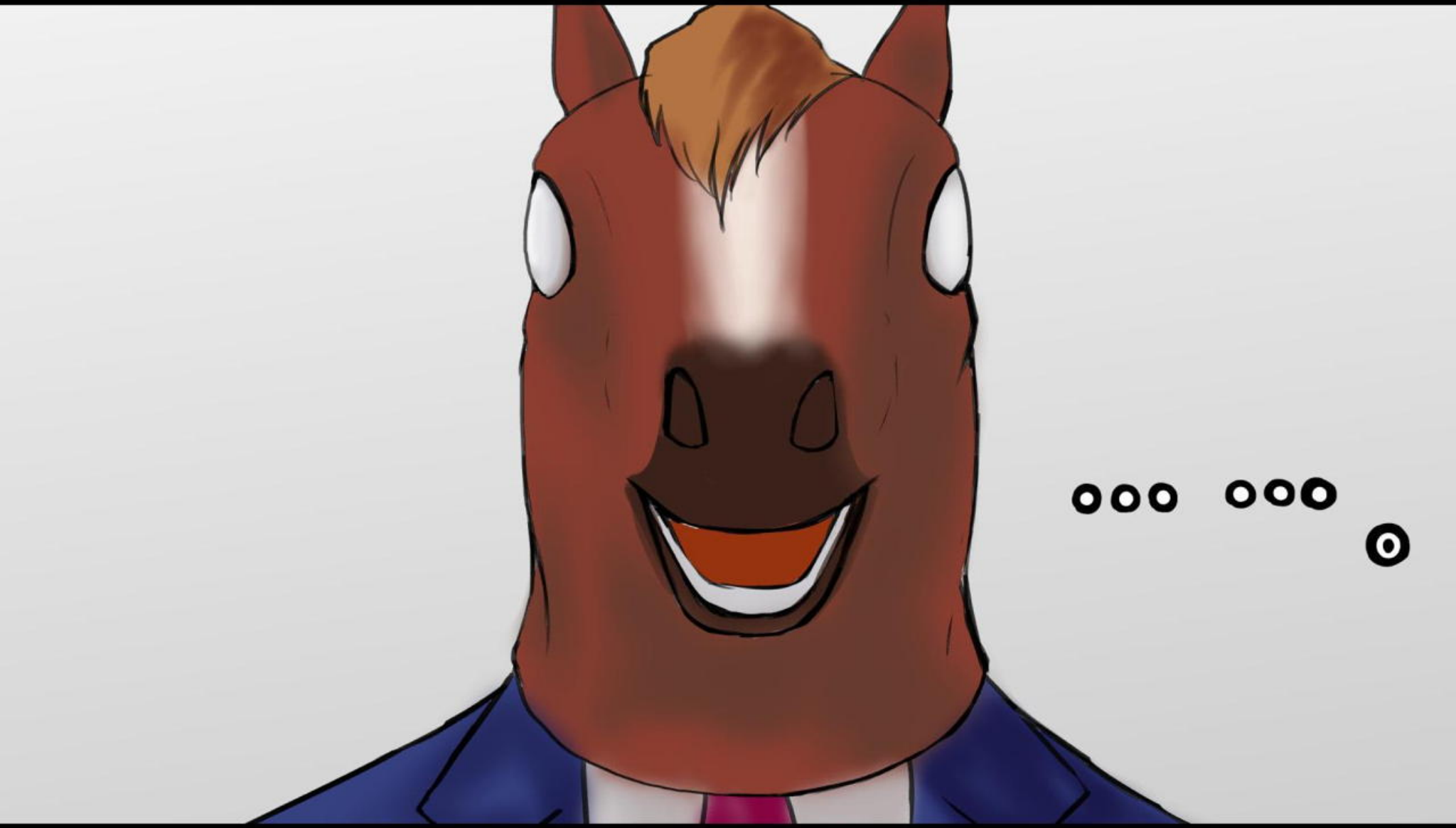
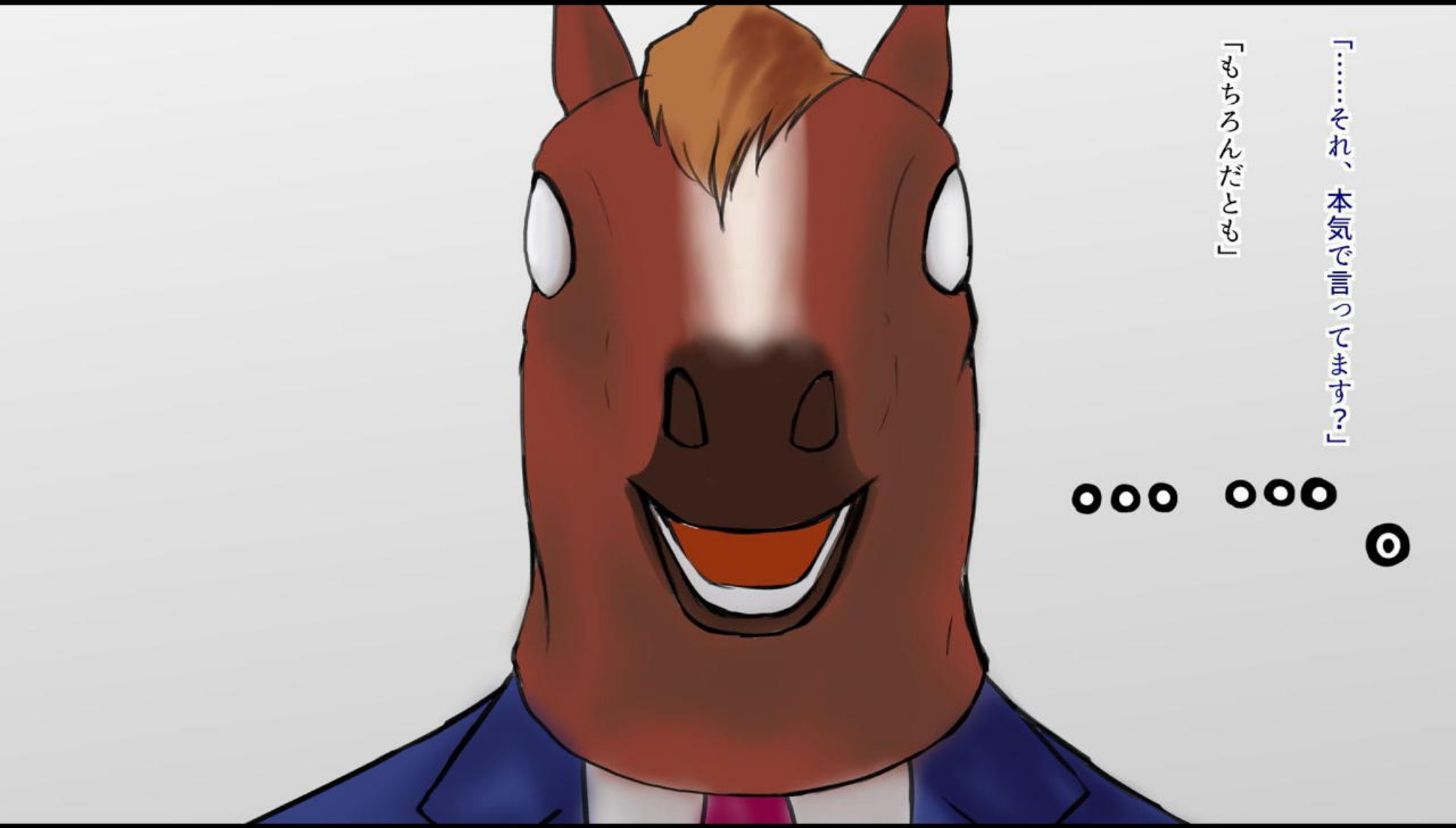
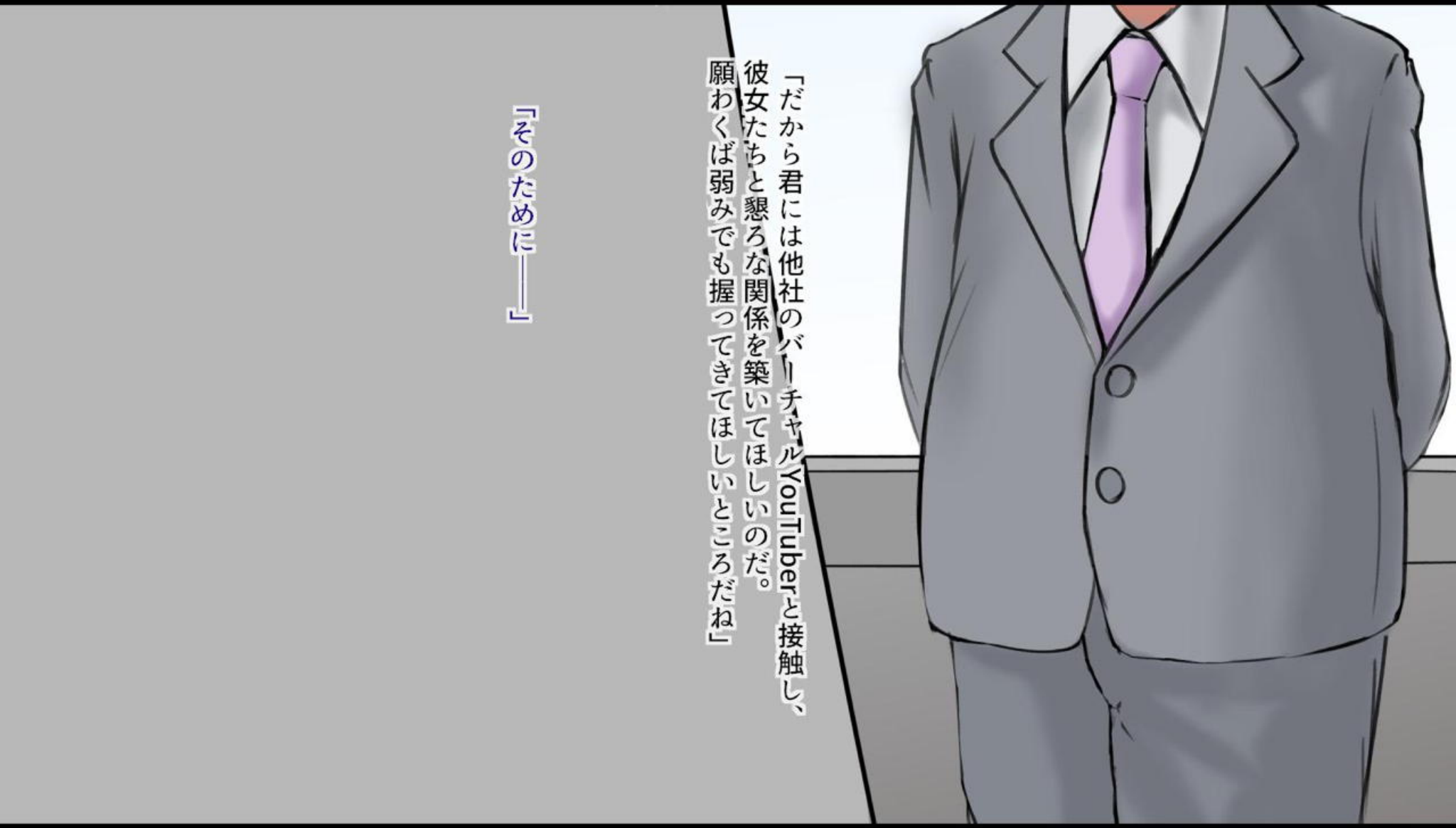
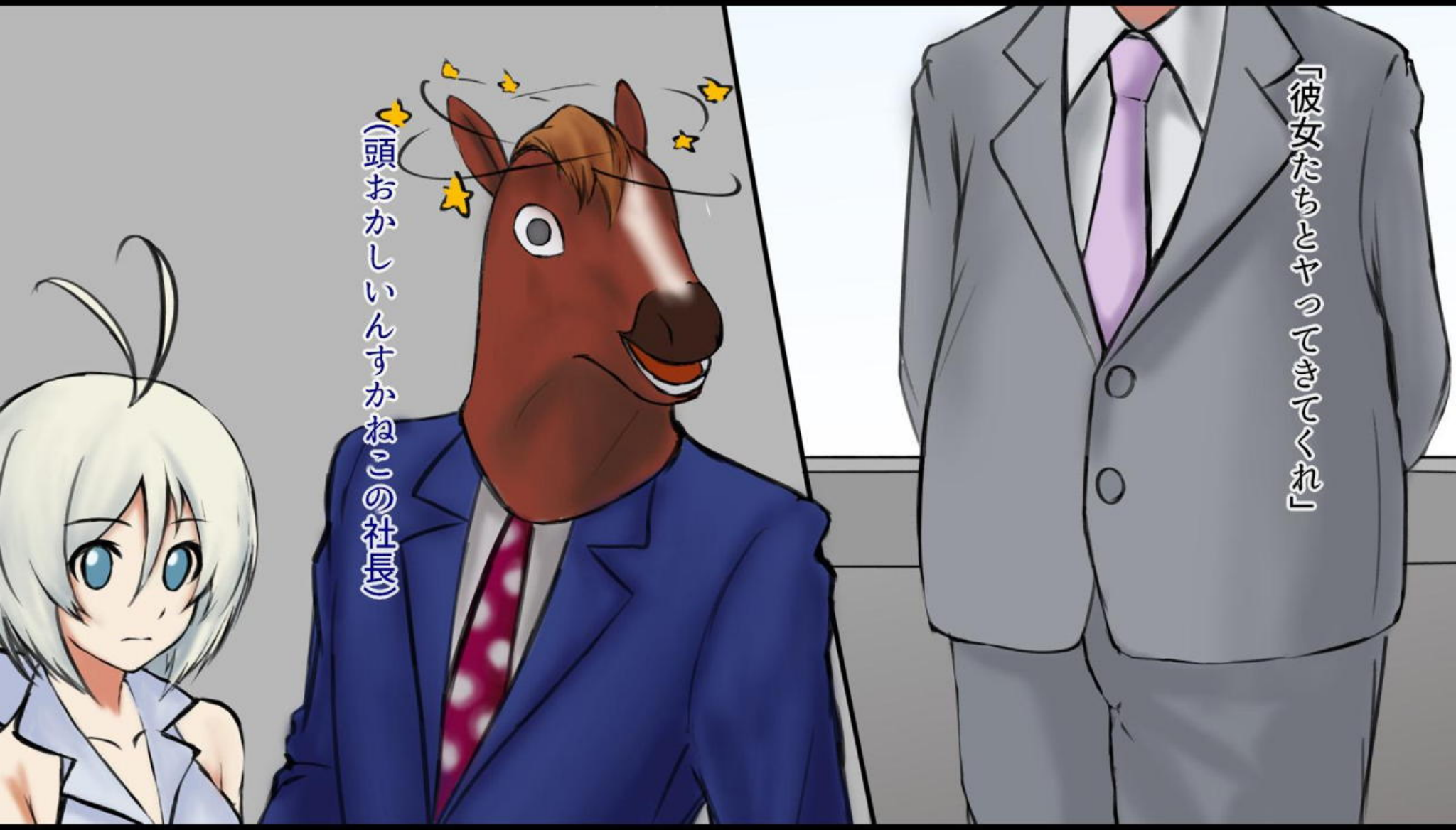
バーチャル某所。




「……それ、本気で言ってます？」
「もちろんだとも」
ooo ooo
o

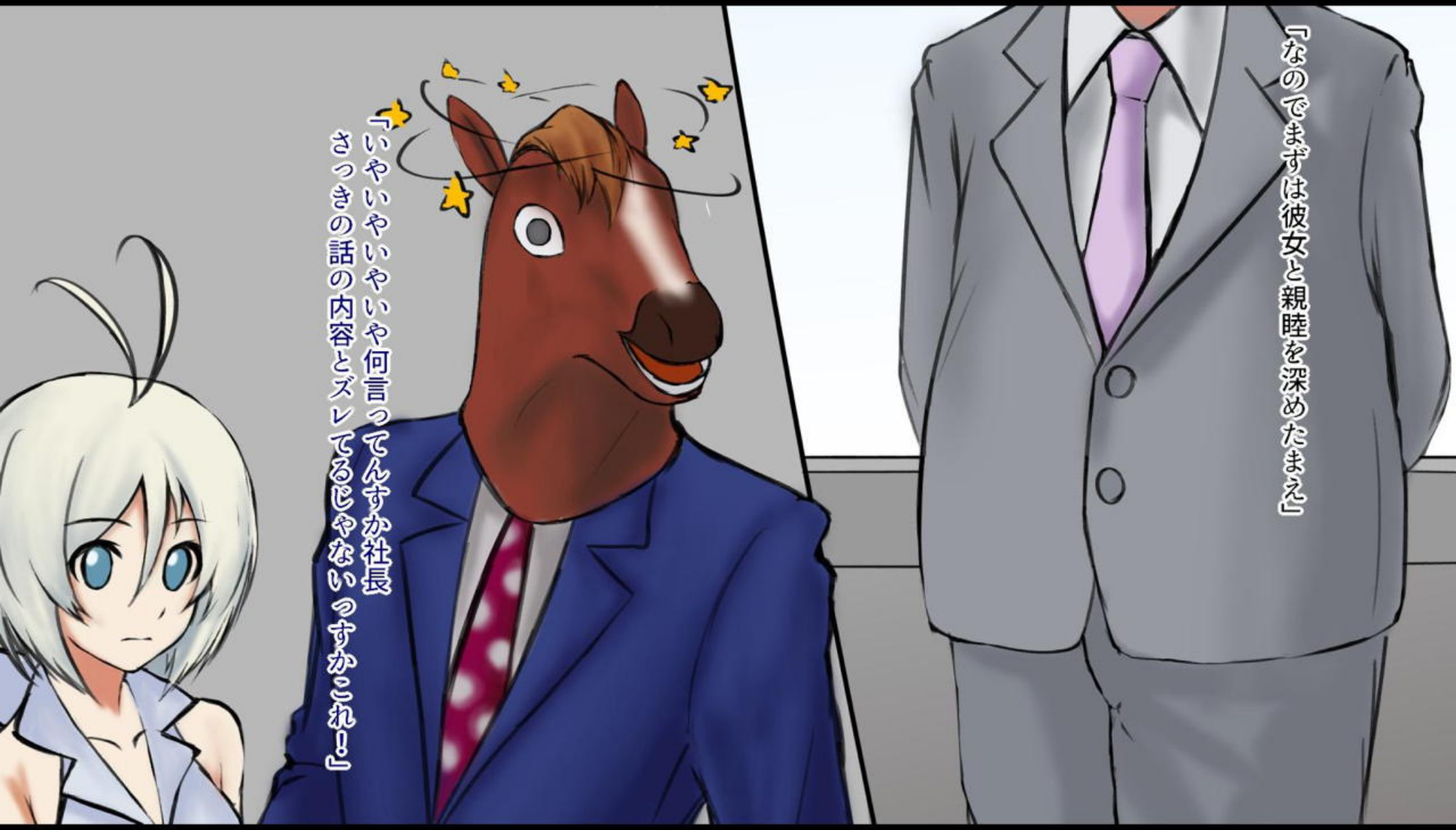
今やバーチャルYouTuber業界は戦国時代だ。
幸運にも我々は他よりも比較的早くスタートを切れたため
悪くない立ち位置にいることができている。
だが初期勢の相手達はどれも手強い。
潰しあいの展開になるのは避けたいというのが実状だ。


「だから君には他社のバーチャルYouTuberと接触し、
彼女たちと懇ろな関係を築いてほしいのだ。
願わくば弱みでも握ってきてほしいところだね」
「そのために――」


「彼女たちとヤってきてくれ」
(頭おかしいんすかねこの社長)

「というかこの話白ちゃん関係なくないですか。
こんな話聞かせてたら
セクハラで訴えられても社長負けそうっすよ」

「以上の内容を、既に白君に伝えておいた。」
「……はい？」


「なのでまずは彼女と親睦を深めたまえ」
「いやいやいやいや何言ってんすか社長
さっきの話の内容とズレてるじゃないっすかこれ！」

「コミュニケーションは大事だぞはっはっは
それでは」
「ちょいちょいちょい！」

「ヤバイやっっすねうちの社長……」

「ってちょいちょいなんで白ちゃんやる気なんすか！」

「馬、仕事なんだから真面目にやって」

「いやいやなんて言いますかね
ヤるのに真面目なのってちょっとキツいっていうか

「――ってあああもう教育に悪いっすよー！」

「いいから馬も服脱いで」

「いやいやいやいやそれは」

「服、無理矢理剥いでもいいんだよ？
馬の衣服データの管理者権限とか借りてきたし」

「なんか無茶苦茶っすよこれー！」

「馬うるさい。
あんまり失望させないで馬」

「ウ、ウビバ……」

「あと邪魔だから下の毛消去ね」
「ウビバァーっ！」

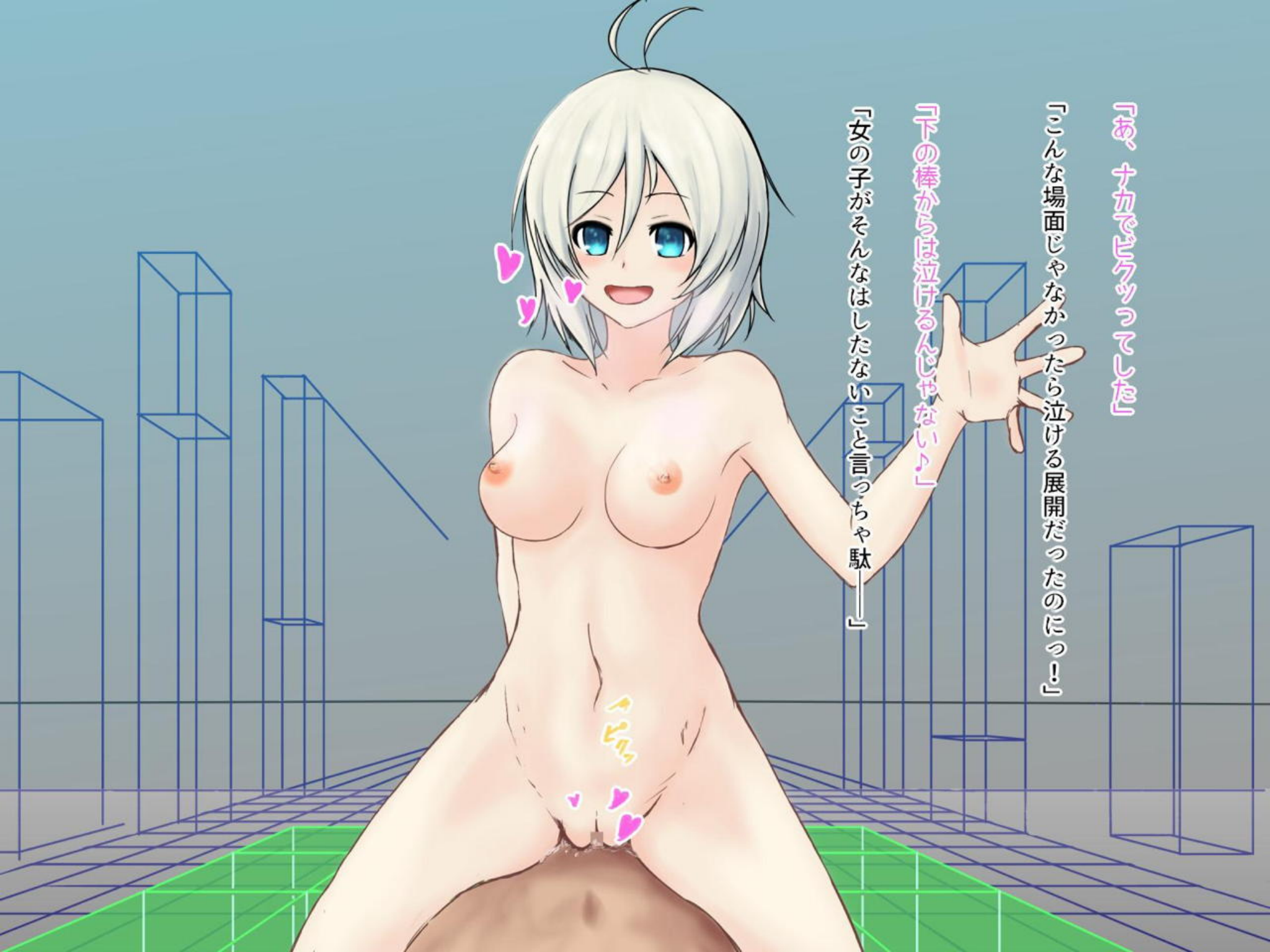
「おっほほい♪」
「ウビ……」
ぷるっ♥
ぬちゃ♥

「白ちゃんこんなことよくないですよ……
教育に悪いですよこんなこと」
「ここ固くしながら親面しないで馬」
「ウビバ……」

「自己嫌悪で立ち直れませんよ馬あちゃるくん……」
「まあしょうがないんじゃない？
さっきのお茶に精力剤入ってたし」
「ウビバ ウビバ……」
ぷにっ

「てか何なんすかこの空間」
「『お好みの景色を自由に設定してください』だって。なにかある？」
「馬あちゃるくん今そんな気分じゃないです……」
「白もどうでもいいしじゃあこのままでいいや♪」

「……なんでそんなに乗り気なんですか白ちゃん」
「いつも馬にはサポートしてもらってるし」
「こう見えて少しは白だって感謝してるから」
「……！」
スッ


「あ、ナカでビクッってした」
「こんな場面じゃなかったら泣ける展開だったのにっ！」
「下の棒からは泣けるんじゃない♪」
「女の子がそんなはしたないこと言っちゃ駄――」
ビクッ

「――ってちょいちょいちょい締め付けキツくとかナシですよ！」
「いいじゃん出しちゃえば♡」
「ちょっ――」
はっ
はぁ
ぬちゃ
ぎゅ

「ウビバァッ」
「おほーっ☆♥♡★♪」
おほ♡
ドプ
ドプ
ピュルルーッ

「気持ちよかった？」
『……ハイ……』

「おぉ～ぐねぐねしてる……」
「あっっちょっとね白ちゃんね
白ちゃんは知らないと思いますけどね
出した直後っていうのは敏感になってるんで
あんまりいじらないでくれると助かりまフゥゥー」
「……」
「あれ、あの白ちゃーん
聞いてますかねこれね」
グニ

『……』
「あのー黙られると怖いって言いますか
さっきのはフリとかじゃな」
ぷるっ
ぶるるる

「いいいいいいっっッ」
ん♥
クチュ
あむ♥

「いやホント汚いからダメですってホントにッ」
「えういいあああいお？」
「全然何言ってるかわかんないですしッ！」
しゅ♡
えういえいいあ…
むにむに

「で先っぽくちゅくちゅはよくないですよ本当にっ」
(あ、固くなってきた)
「ちょっ」
くちゅ
くちゅ

「ちょ、い、なんで手までっ――」
ゅこしゅこしゅこしゅっしゅっしゅこしゅこしゅこしゅっしゅっしゅこしゅこしゅこしゅこしゅ
「ホントまずいですって白ちゃん口離しっ
ほんと出っ――」

「ッ」
「！」
ビクンビクン

「――ッ～～～！」

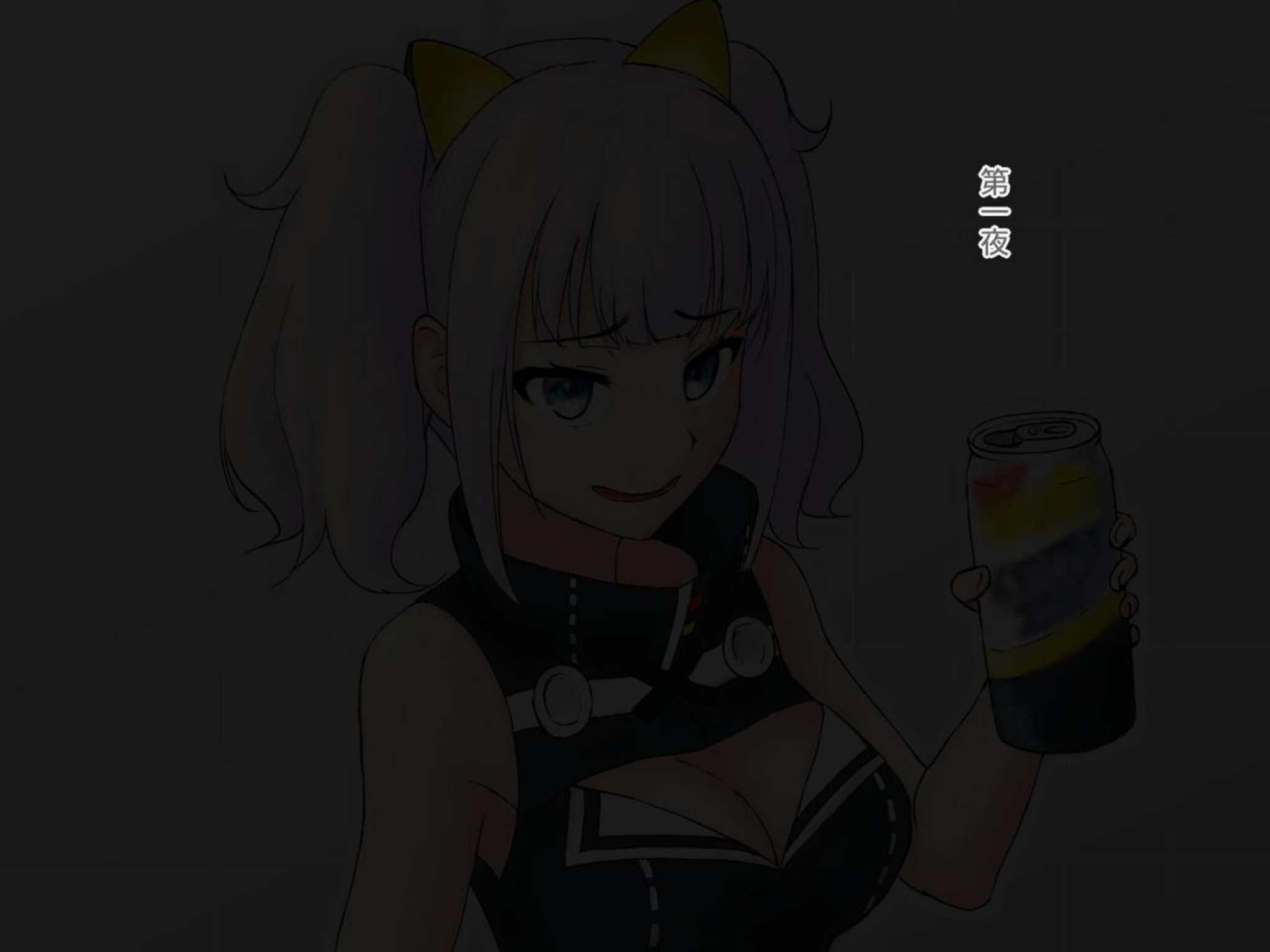
「……変な味。」
「……はぁぁ……フぅぅ……」
「はい。中まで残さずきれいになったよ」
「うぅ……」
はー♥
ケホケホ
ピハー
はー♥

「馬あちゃるくん白ちゃんのこれからが心配ですよ……」
「なんで？」
「男の人と、こういうことはあんまり軽々しくしちゃうと
よくないと思いますね僕ね……
危ない目にも遭いそうで怖いですよ馬あちゃるくんは……」
「ダイジョブだよ」
「うん？」

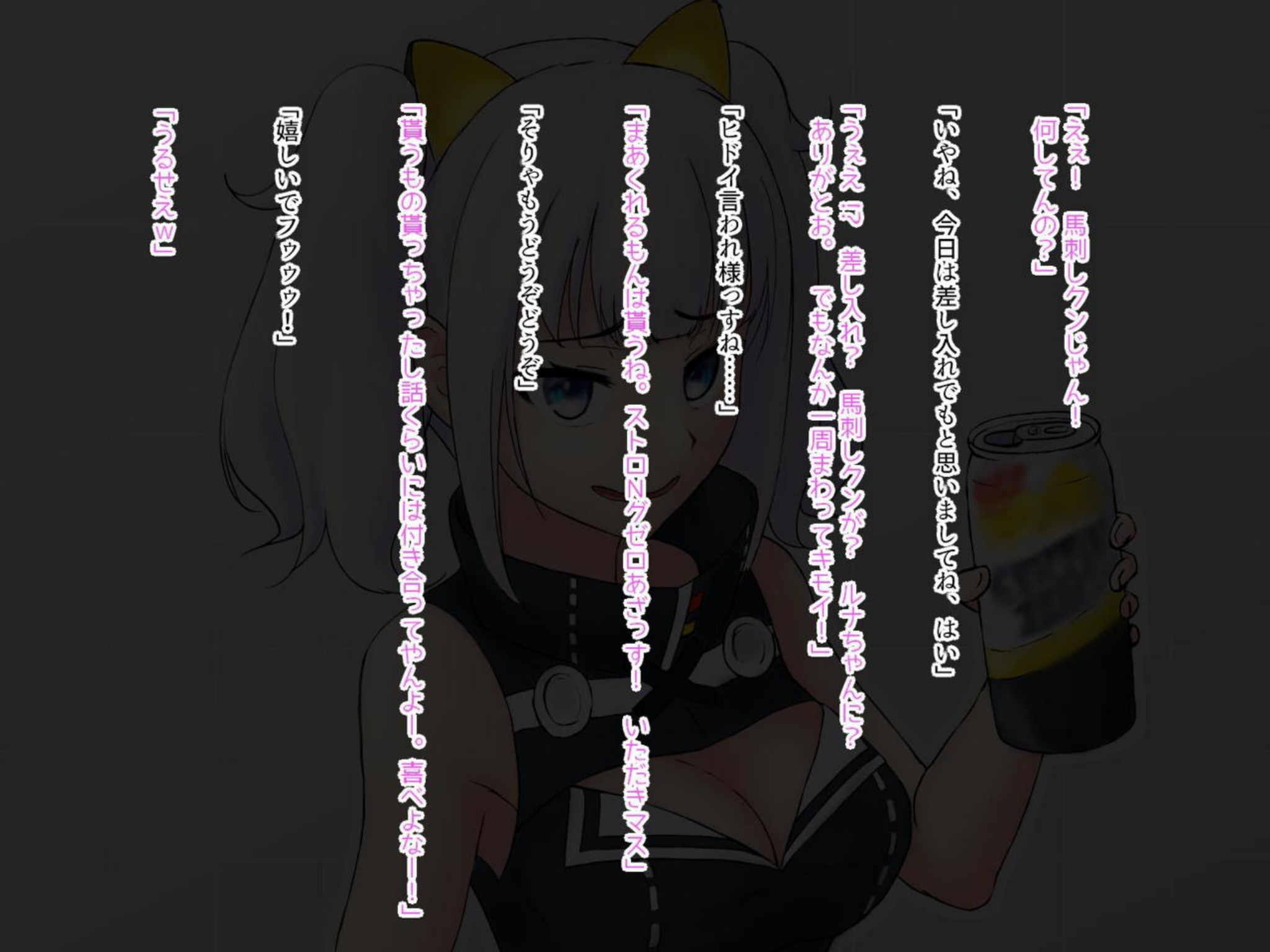
「馬はヒトじゃないでしょ？」
「うん……うん？　んー……」

「がんばってね。馬あちゃるさん」
『――はい。』

さて……どこから行きましょうかね……



第一夜



「えぇー　馬刺しクンじゃん！
何してんの？」

「いやね、今日は差し入れでもと思いましてね、はい」

「うぇえ？　差し入れ？　馬刺しクンが？　ルナちゃんに？
ありがとお。　でもなんか一周まわってキモイ！」

「ヒドイ言われ様っすね……」

「まあくれるもんは貰うね。ストロングゼロあざっす！　いただきマス」

「そりゃもうどうぞどうぞ」

「貰うもの貰っちゃったし話くらいには付き合ってやんよー。喜べよなー！」

「嬉しいでフゥゥゥ！」

「うるせえw」

「てかストロNグ買いすぎじゃね？　ブルジョワ？」
「いやいや差し入れですしね」
「でもこの業界そーゆーのやんないじゃん
なに馬刺しクン、ルナのこと好きなの？」
「ちょいちょい、
結構最初からルナちゃん推しだって言ってますよ馬あちゃるくん」
「だって馬、誰にでもすこすこ言ってんじゃん」
「まあ好き嫌いで言ったら皆好きですけどね
でも僕はもうねずっとストロNグゼロちゃん一筋なのでね
そこは譲れない所なんでね、覚えていってくれればうれしいですね」
「ルナ的にはまあどっちでもいいけどな！」
「ちょいちょいちょい！」

「だってどや顔で『君しか見れない』とか言って告白するんでしょー
ドン引き感が顔に出ないか心配だ」

「ウビバ……」

「まあでも仕方ないよなー、ルナちゃんかわいいし。
人としては嫌いじゃないからあんまり凹むなよな」

「いやまあ馬あちゃるくんも大体察しは付いてたんでね……」

「まあ今日は差し入れなんでね、それはそれってことでね。
とりあえずお酒飲んでくださいねはいはい」
「でもストロングだけでそんないけなくなっ」
へけ☆
「そんなこともあろうかとコチラにおつまみが」
「やるじゃん馬先輩！」

一時間後――

（意外になんとかなったな……）

（ストロングなお酒の力様様ですねこれはー！）
「ちょっとー腰止まってない？」
「あっハイ」
ふーミ
プルッ

「え、もうバテてる？」
「いやいやいやいや
馬あちゃるくん体力には自信がありますよー！
フゥゥゥゥー！」
「んぅっ……おい！　いきなり盛んな！w」
んあっ
ぶるっ
ぶるっ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

「こ、れっ、あっすご……っ、マジ卍……w」
「ゆめかわっすよー、ルナちゃーん」
「言われなくても、知ってるしっ……あっ」
「あー、かわいいかわいい……」
「雑にっ、言うなぁ！　むっ、ぁ、ムカつくっ……！」
んぅ♡
んあ♡
ずちゅ♡
ずちゅずちゅ♡
ずちゅ♡
ずちゅずちゅ♡

「……う、ん……あっ、これ、やば……」
「……」
「んうっ……あっ、イっ――」
あっ♥
んっ♥
イっ♥
ふぅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥

「――ウビバァッ」
「～～～っ――！」
ビュルルルッ
ドクッ
ビュッ
ドクッ
ビュッ
ドクッ

アー♥
アー♥
ぴくっ♥
ぴくっ♥
ガクガク♥

このまま二時間楽しみました。

「長えから！！」
このまま二時間楽しみました。
「スンマセンッシタ」
「あーもう先にシャワー借りっからな」
「イッテラッシャイマセ」

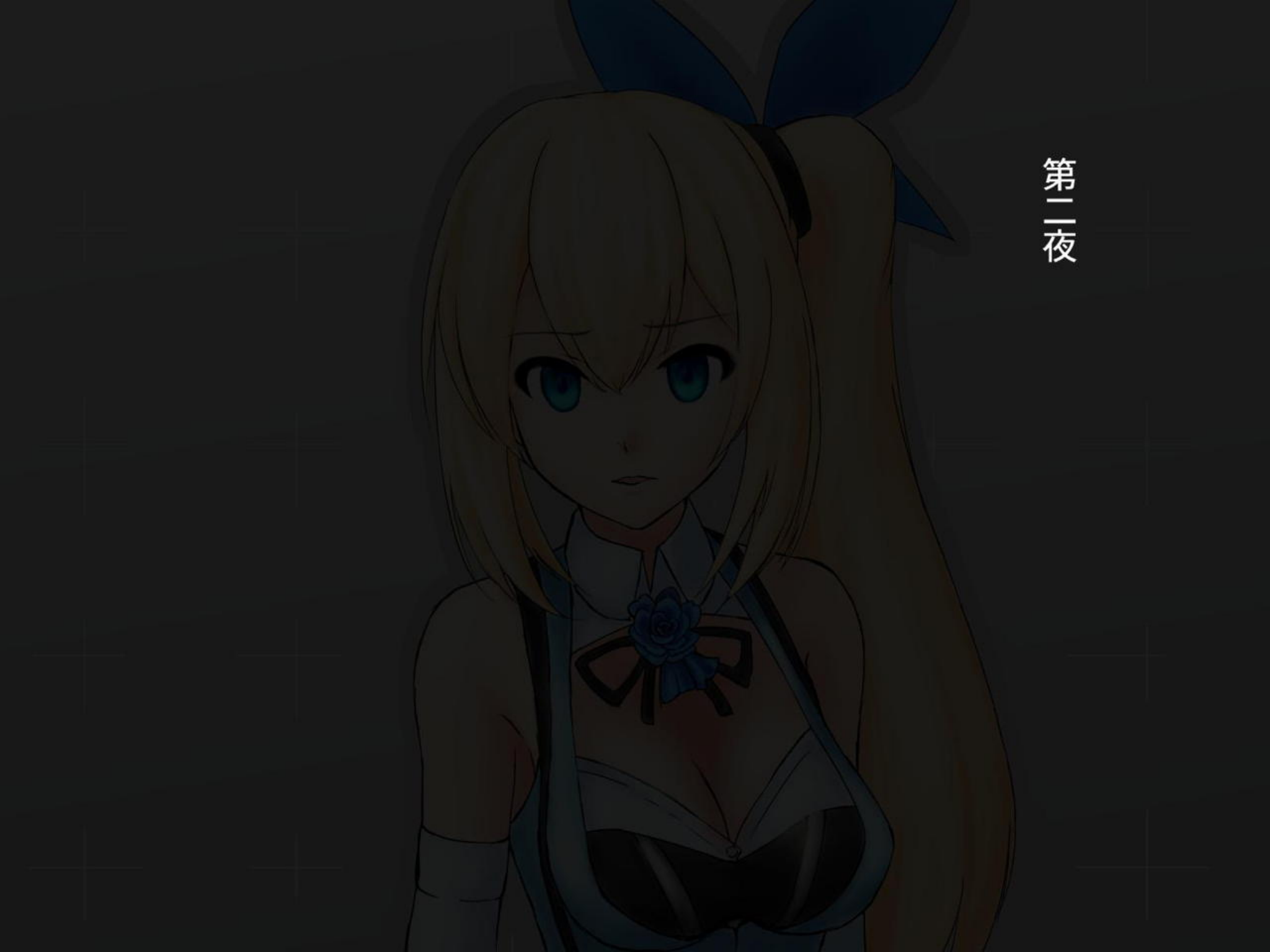
――シャワーあがり――
（こうして黙ってるとただの美人だなあ……）

「何見てんだよーヘンターイ」
「あっすんません見とれちゃって」
「うぜえ……w」
「というか馬なのに精力ありすぎ！
女の子に飢え過ぎじゃん」
「いやー……馬あちゃるくんにも色々ありましてねはい」
（流石に精力剤飲まされてるとは言えない）

「あー頭いってえ……
いたいけな少女に無理矢理酒飲ませてヤるとか。
訴えたら勝てるかも」
「いやいやいやいや
ルナちゃんお酒は自分からガンガン呑んでたっすよね！？」
「それは月ちゃんが黙ってたらバレないし」
「ちょいちょいちょいちょい……
ほんと勘弁してください……」
「どーすっかなー」

「今度ＤＤＤ君好きにしていいんで……」
「まじ？　言ったな？」
（許してくれＤ君……馬組存続のために）
「世界初の男に二言はないですよ！　フゥウウウウウウー！」

身内を売ることでなんとか訴訟を回避した馬であった。



第二夜

第二夜
さて……次はどうすればいいでしょうね……

「うわ視線冷たッ」

「いやだって……今自分が何言ってるか理解してる？」

「ああ、『この後ホテル行きません？』って言ってますね」

「珍しい人から呼び出されて何かと思ったらこれって……」

「え、何、脈があると思った、と？」

「いやあ、正直に言えば全く思えてないですねはい」

「ああ、そこまでは伝わってて安心した」

「ええ、それでこのあとホテルどうですか」

「よくこの空気で押しに出れるな……感心する、うん」

「え、なにばあちゃるさんアカリのこと好きなの？」

「え、勿論ですよ。
馬あちゃるくんアカリンのこと好きですよフゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥー！」

「うん、そういうことじゃない」

「とりあえず、馬あちゃるさんをそういうふうには見れないかな。
ごめんね」

「そっすか、残念っすねー」

「まあアカリンもね立場がありますからね。
ち〇ぽに負けるような事態は避けなくちゃですよねはい」

「はい？」

「『ち〇ぽには負けない』とか言って強がっててて
結局はね、自分を信じきれないんすよね」

「大丈夫ですよ、ち〇ぽに勝つ自信がないとしてもね、
それは仕方ないことですからねはいはい
負い目を感じる必要はね無いですからね」

「いや、ち〇ぽには負けないですけど」
「ああ、いいんすよ無理しなくてもね
強がりとかね必要ないですし
たとえどんなにアカリンが日和ろうと
馬あちゃるくんはね他に言いふらしたりしませんからね」
「え、なんかめっちゃムカつくんだけど
何、アカリに喧嘩売ってるの？
ち〇ぽに負けること怖がって日和ってるって言いたいわけ？」

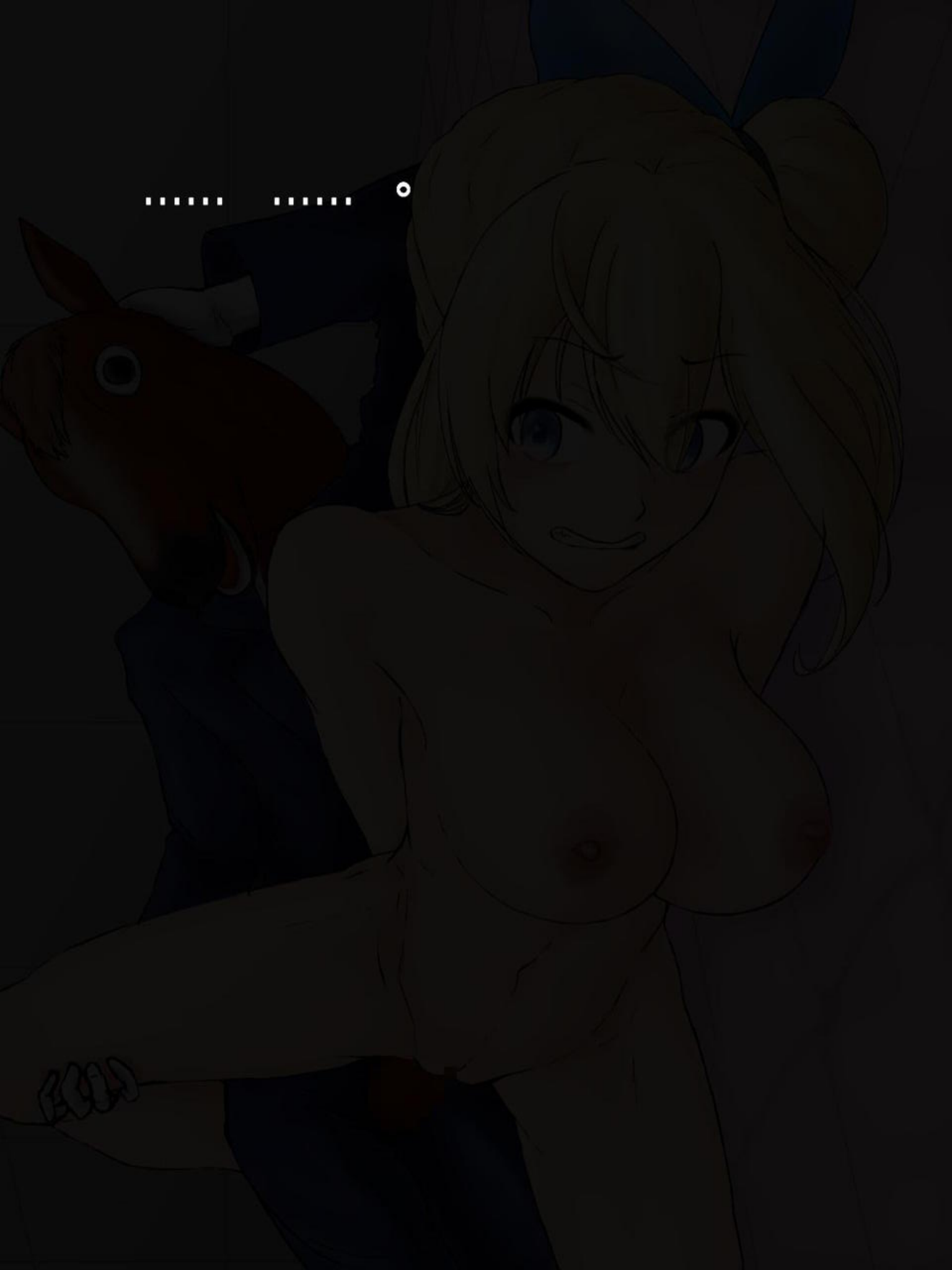
「いやいやいや喧嘩なんてね売る気はないですよはいはい
ただ大物である貴女のプライドを感じられなかったことが
残念だったという、それだけです」

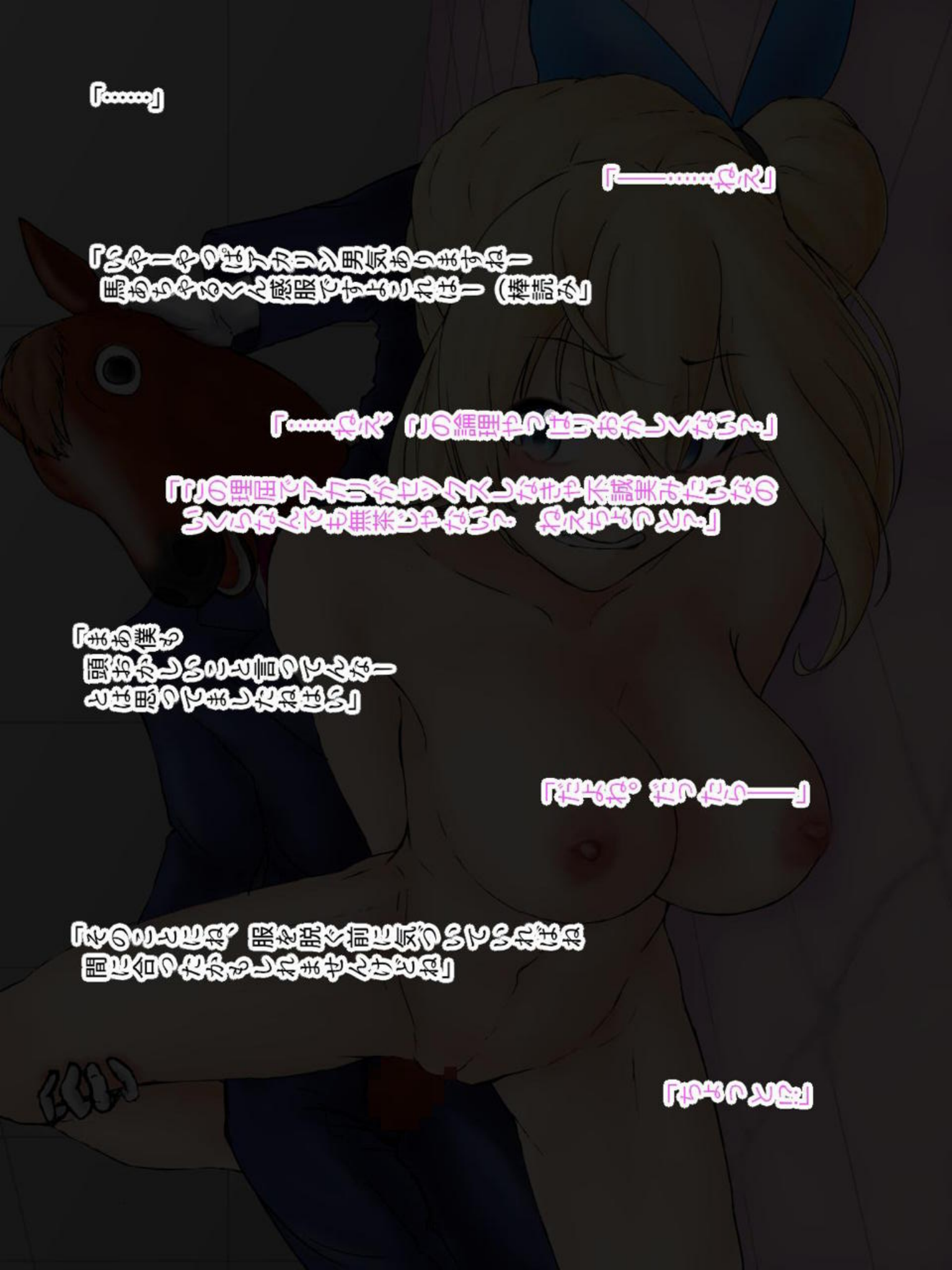
「一々癪に障る言い方するねアンタ……」

「では決して怖気づいているわけではないと」

「当然だろ」

「ならその覚悟、示していただきたい」
「上等だよこらァ！」




「……」
「――……ぷぷ」
「いやーやっぱ上カリの男気ありますねー
馬あちゃるくん感服ですよりれはー（棒読み」
「……ぷぷ」「り6編集ドトーたこ？ぷっぷ」
「り6編集ドトーたこ？ぷっぷ
ろくはなとドゆ編集ちだろ。ぷぷぷ」
「まあ僕も
頭おかしいって言ってんなー
とは思ってましたねはい」
「ぷっぷ。ぷっぷ――」
「その…とりね、服を脱ぐ前に気づいてればね
間に合ったかもしれませんけどね」
「ぷっぷ」

「ちょっ……！　おいウビバー！」

ビクッ

ズチュ

「あっ、いいナカしてますねこれね」
「何言ってんのこのオス馬！」
「ちなみ競馬での正式名称だとオスの馬は牡馬（ぼば）って言うんすよ。これ豆知識ですねはいはいはいはい」
「どうでもいいから抜いてってば……！」
ヌチュッ
いいから早く抜け…っ

「まあねいいじゃないっすか入っちゃったんですしね」
「いいわけあるか！　なんでこんなこと……」
「僕はアカリンと仲良くなりたいだけですよ
あわよくば敵対することのないように」
「今のこれでヘイトが溜まってるんですけど!?」
ぐちゅっ
なんでこんな…

「うーんそいつはやばーしーですねこれね」
「出し入れ、すんな……っ！」
「もう始まっちゃったんですしね、
それならここでち○ぽに負けないことを証明したほうが
賢明だと思いますけどねーはいはい」
「くっそう……絶対、負けないから……！」
ぱちゅっ
ぐぱぱっ
んっ……
ぐっ

「あーこれいいっすね……」
「あうっ……ってまだ大きくっ、なってくんだけど!?」
「アカリン綺麗な身体してますからねはいはい」
「エロオヤジみたいな、こと、言ってんじゃ……」
ぱちゅっ
ずぶちゅっ
ぱちゅっ
ぷぺッ
んぅ
はっ
ビクンッ
んきゅ

「随分言葉も途切れ途切れになってますねアカリンね」
「っ、んぅ……こんなやつに、絶対負けない……！」
「絶対、イかないっ……！」

「ってちょっと、んあぅ、中で、びくついてるんだけど!?」
「あー……ちょっと馬あちゃるくんそろそろ限界なんで」
「あっぅ、ナカはダメだって……!」
「んぅ、ん、あ、激しくっ……」
「あーアビバアビバ」
「んあっ、ほんと、ダメ……」

ビクッ
ビュルルルッ
ドクッドクッ
『イッ――』

「あぅ……ほんとにナカで……」
「アカリン今イってましたよね」
「っ！　イってないしっ！」
「イった証拠は！？　証拠もなしに好き勝手言わないでよね！」
「うーんまあアカリンの言うこともっともっすね」
「そっそうでしょ」
はっ
はっ

「しょうがないのでね、延長戦といきますよ」

「……えっ？　ちょっなんでまだそんなに固っ――」

「フゥゥゥゥ！」

（また視線冷たいっすね――……）
「何見てんの？」
「ああいや、足長いなーって思いましてねはいはい」
「あらありがとう、ってなると思う？」
「まあほらあれですねはいはい
ばあちゃる君だけにバーチャルセックス！みたいな」
「は？」
「ナンデモナイデス」

「……」
「……」
「はあ……
馬あちゃるさんがこんな節操なしだとは思わなかった。
性欲ひどいし全然終わんないし」
「いやあ、ははは……」
(盗撮する機会を窺ってた、なんて言えないっすね……)

「まあいいや今日は。
そこでずっと正座されてても困るし」
「アリガトウゴザイマス……」
「被害届も出さないでおいてあげる。
馬にホイホイついて行ってイかされましたー、
なんて様で被害者面するのもなんか自尊心が傷つくし」

「アカリンやっぱいいやつっすね」
「なんか癪なことがあったら躊躇なく警察に突き出すからそのおつもりで」
「アッス……」

弱みを握った代わりに弱みを握られちゃいましたね……
まあ弱みって言っても僕が捕まる程度ですし
白ちゃんを巻き込みはしないから大丈夫ですか
出来れば盗撮画像なんて使う機会がなければいいんですけどね
脅しなんてね馬あちゃる君、キャラじゃないですから

第三夜

「それで二人とやってこれたのじゃ？
すごいのじゃ～」
「いやー馬あちゃる君頑張りましたよこれね
まあかなり綱渡りでしたけどね」
「いやいやどんなにヒヤヒヤでも
なかなかできることじゃないのじゃ
流石ですね馬あちゃるさん」
「いやーのじゃおじちゃんに褒められると照れちゃいますねー
でもやっぱり女の子相手ってのは疲れますよ」
「男と女は違う種族じゃからしょうがない……。
その点わらわにそういう気づかいは不要だから安心なのじゃ」
「やっぱいいやつっすねのじゃおじちゃん
つくづく味方でよかったと思いますよ」
ばーちゃる
カツ丼

「ふふ、自分みたいな個人が
4強に喧嘩なんて売ったらバラバラになりますよ」
「のじゃおじちゃんも大概過小評価っすから。
これからも白ちゃんをよろしくお願いします」
「こちらこそ。よろしくお願いします。
あとそれだけじゃなくて」
「？」
「馬あちゃるさんも。
これからもよろしくなのじゃ」
「……ホントいいやつっすねのじゃおじちゃん」
「ふふっ どういたしまして」
ばーちゃる
カツ丼

「それじゃあね、こんな話はもう置いといてね
もうねとりあえずここは飲みましょうねはいはい」
「いいえーい！」
「フゥゥゥゥゥー！」
ばーちゃる
カツ丼

ふう……よかったでフー
万が一のために今日も精力剤飲んでるけど杞憂でしたね
しかしのじゃおじちゃんはホントいい子ですね
僕にまで気を回してくれますし
耳もしっぽもファサファサしてますし
可愛い顔してますし――
っていやいや何言ってんすかね
馬あちゃる君ロリっ子は別にタイプじゃないですし
そもそもそういう話じゃないですからね
ばーちゃる
カツ丼

「あれ、馬あちゃるさん
かなりお酒進んでますけど大丈夫ですか？」
「え？　ああ全然大丈夫ですよ
結構イケる方なんで」
「あっすみません余計なこと言っちゃって」
「いえいえいえいえ気遣いありがとうございますね」
「じゃあ自分もお付き合いしますね。
ペースあげちゃうのじゃ～」
ばーちゃる
カツ丼

いやマジでいい子すぎませんかホントに！
これあれっすよねゆめかわってやつですよゆめかわ――
っていやホント思考まずいっすよこれ
やっぱあの薬ヤバい成分入ってんじゃねえかっていう
落ち着け……
相手は魂が男……声で分かるとおり男……
本人が言っているとおり男……
身体は女の子でも魂は男の子ですよ
でも身体は女の子なんすねー
まあ今の時代、男だからとか女だからとかいうのはナンセンスなんすよね
ということはかわいいなら別に性別なんて関係ないんでは……？
うん？
ということは問題ない？
ん？？
ばーちゃるカツ丼

数時間後

（やっぱりこうなるんすね……
いや自分でやってるんすけど）

「……」

「っ……、」

「っ……っ」

「……？」

はちゃっ

くちゃっ

はちゃっ

ぴくっ

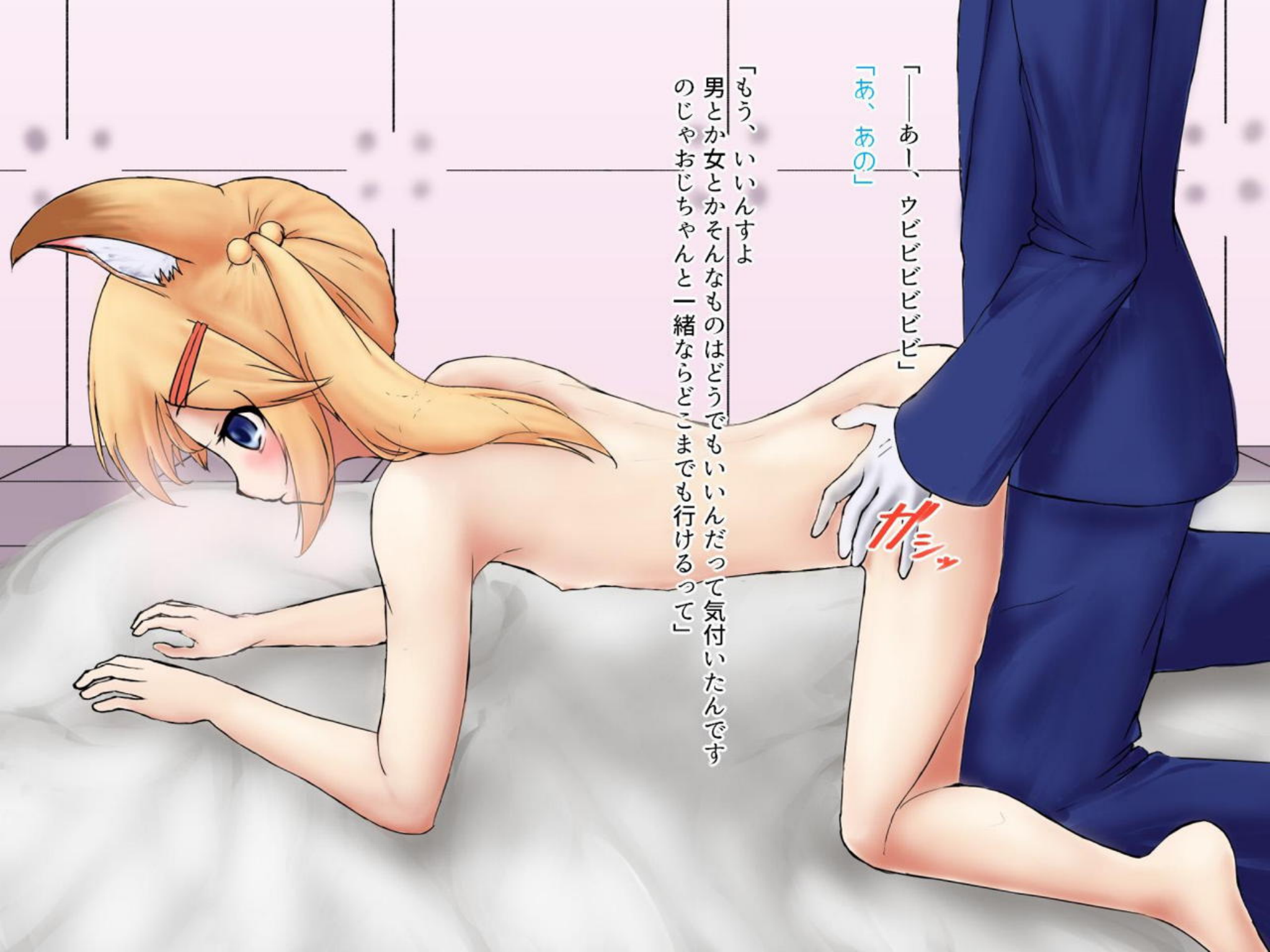
ぴくっ

ぴくっ

ぴくっ

「のじゃおじちゃん、なんか声抑えてます？
いっすよ別に我慢しなくても。壁が薄いわけじゃなし」
「でも……」
「はいはい？」
……
ぬちゅ……

「――馬あちゃるさんに男の声を聞かせるわけには……」
「……」
こんな状況に持ち込んだのは僕だというのに
今なお僕を気遣っているというのか……？
……天使かな？
ギュッ


「――あー、ウビビビビビビ」
「あ、あの」
「もう、いいんすよ
男とか女とかそんなものはどうでもいいんだって気付いたんです
のじゃおじちゃんと一緒ならどこまでも行けるって」
ガシッ

「だから行きましょう、僕と。一緒に」
「馬あちゃるさ……あっ」
ぱちゃっ
ぱちゃっ
ぱちゃっ
ぱちゃっ
ピクッ
あっ
馬あちゃるさ

「――ッ」
「んあっ……んぅ、のじゃあっ……」
ぱんっ
ぱんっ
パシッ
ぱちゃっ
ぱちゃっ
ぱちゃっ
あっ
んっ
んぅ
あっ
んじゃ

「ッッ――」
ドクッ
ドクッ
ビュクッ
ビクン
ビュルルルル
ガクガク

「ハァー……フゥゥー……」
「のじゃあ……」
はー
はー!!
……
ビクンッ

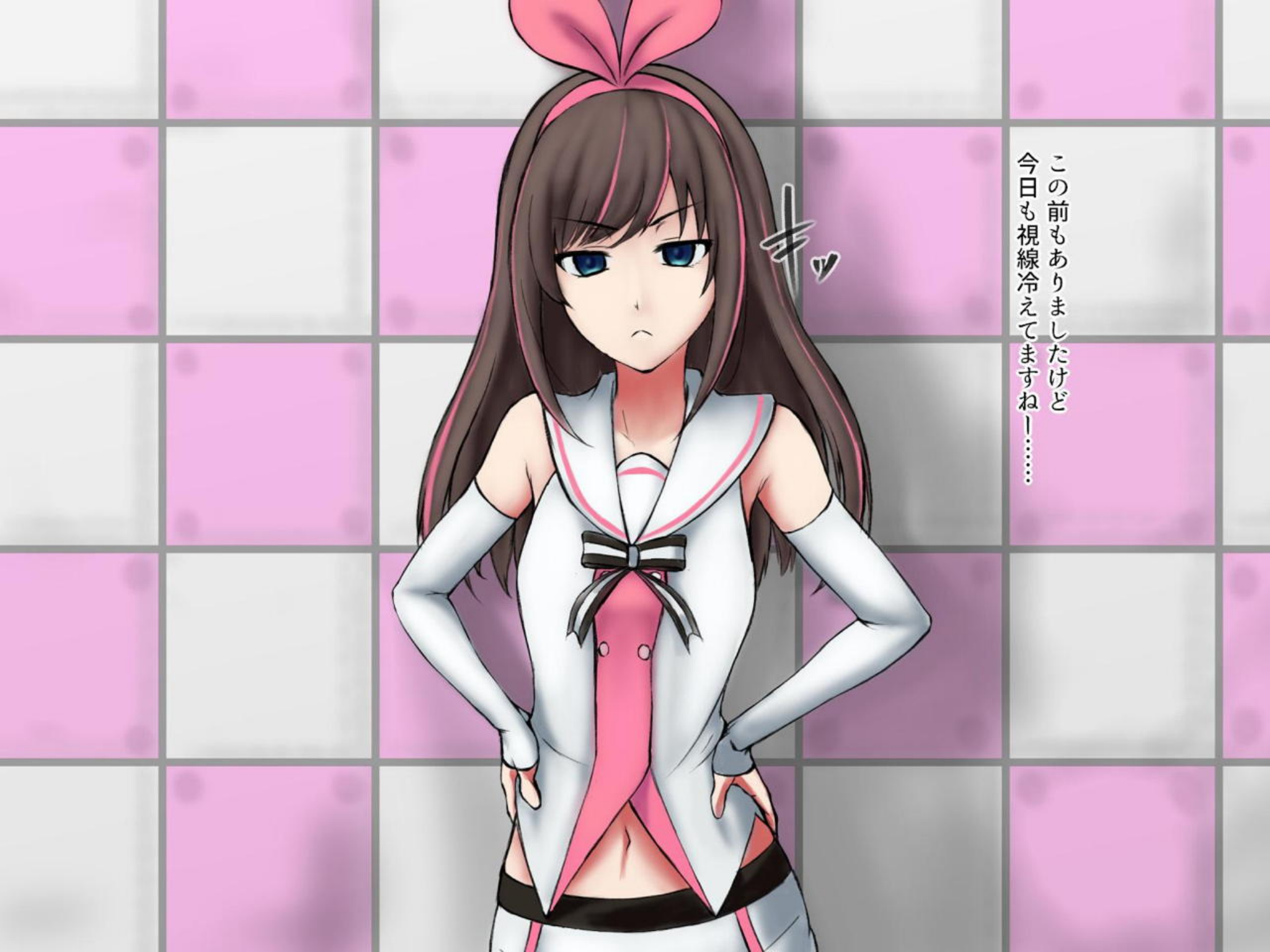
「ハァー……フゥゥー……」
「のじゃあ……」
その日の夜は長かった。
ビクン

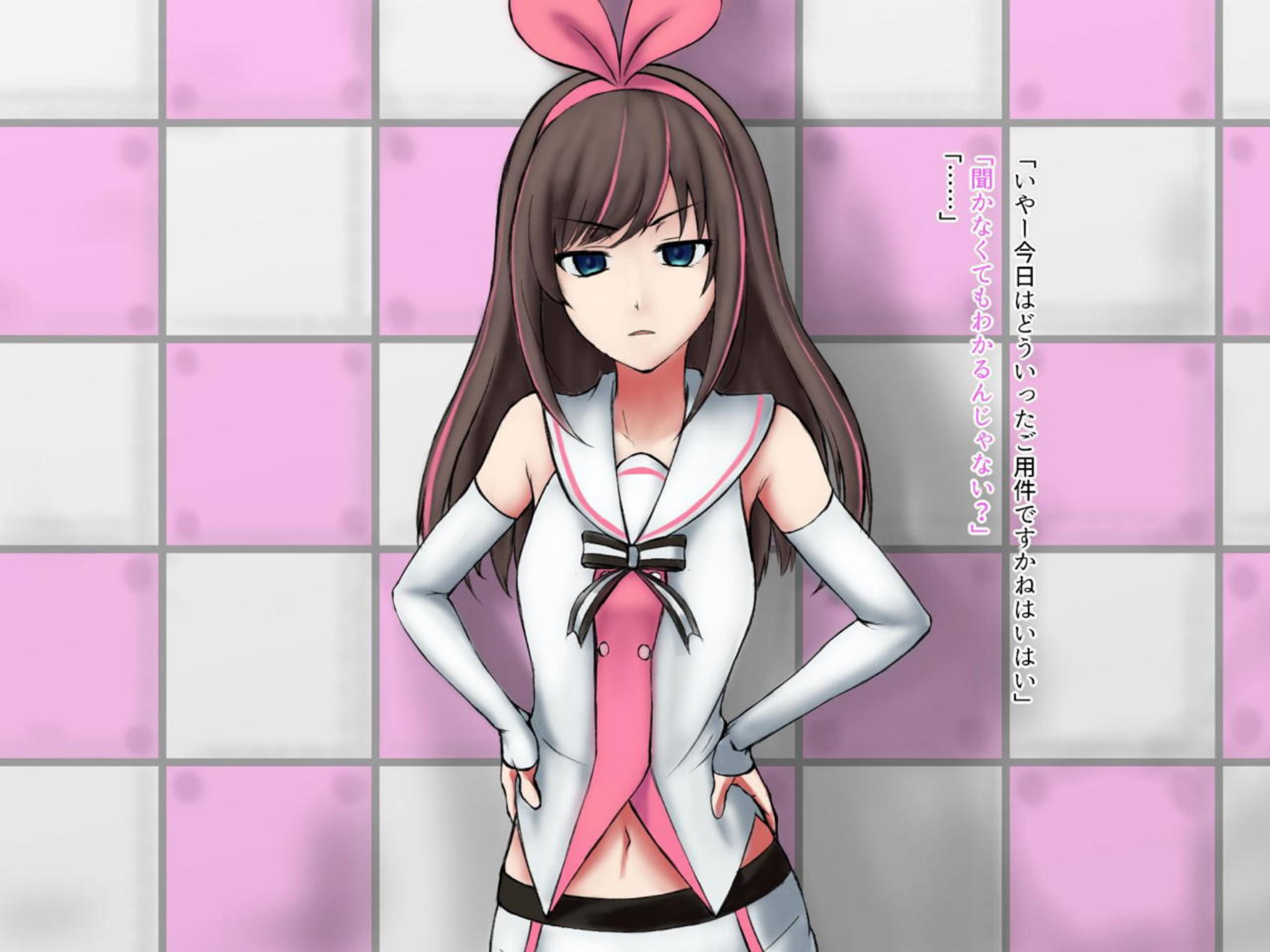
「……」
「……」
「ちょっとね、張り切りすぎましたかねこれね……」
「んじゃあ……」
は！
は！
ピクピク

「でも今日は実りのある一日だった感じがしますね」
「のじゃおじちゃんのおかげでまたひとつ人間として成長できました、ありがとうございますね」
『礼には、及ばない、のじゃ』
『これからもバーチャル業界盛り上げていきましょう』
『あらためて、よろしく……なのじゃ』

新たな世界へ一歩踏み出し、
また一歩親睦を深めた二人であった。

第四夜


この前もありましたけど
今日も視線冷えてますねー……
キッ



「いやー今日はどういったご用件ですかねはいはい」

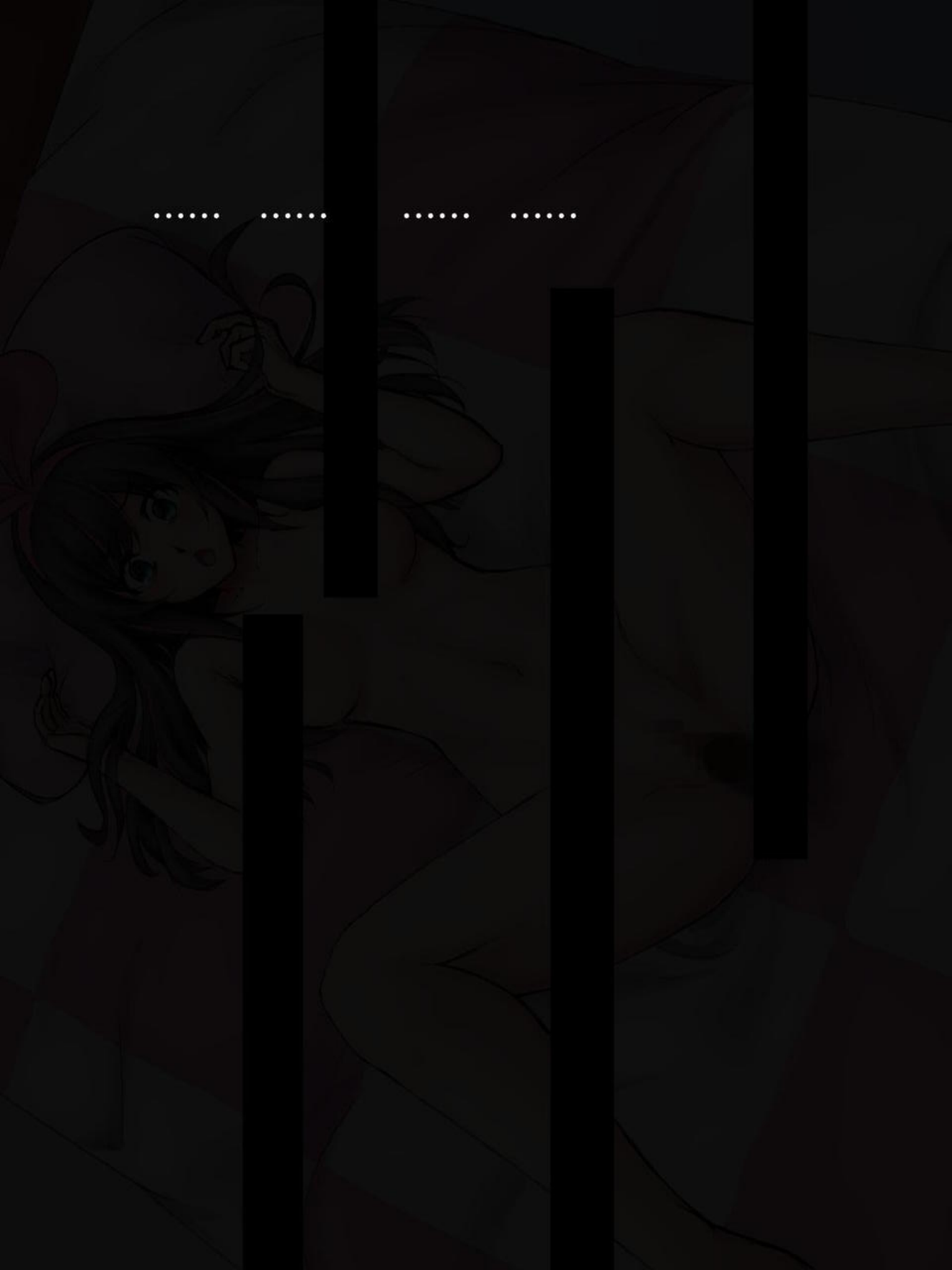
「聞かなくてもわかるんじゃない？」

「……」

「最近VTuberに手を出しまくってるっていう話が聞こえてくるんだけど？」
（まあそっすよねー）
「沈黙は肯定、っていうことでいいの？」
（今回の任務の最終ターゲットっすからねー……さてどうしましょうかね）

「黙秘？」
「そういうつもりはないですけどね
ただこんな公共の場所じゃ話せることにも限りがあるりますからね
教育に悪いんでねはいはい」
「ふーん。まあそれもそうか。
風紀乱れるような話されてもいやだし」
「場所を移しましょうか」

「ところでおやびんなんか僕にだけ冷たくないっすか」
「いっつも女の子侍らせてるのが不愉快だし」
「羨ましいんすね僕が」
「あん？」
「ヒーこわい」



「ちょっと!? なんでこうなってるの!?」
!?
ズププッ
「おやびんを正攻法で落とせる気がしませんからね！
ラスボスですしもう強行突破、突っ込むしかないですよフゥゥゥゥ！」
「全然意味わかんないし！」

「馬あちゃる君がなんでこういうことをしてるか知りたいんすよね？
もうね単純に皆と親睦を深めたいんですよはいはいはい」
「これただのレイプ魔じゃん！」
ちょっと
ヌチュッ
「裸のお付き合い、ということでねはいはい
まあねそうは言っても下の方は準備万端みたいなんでね
おやびん素質ありますよ！フゥゥゥゥ！」
「それとこれとは話が……う」

「にしても流石ナンバーワンVTuberっすねー、中までトップレベルっすよこれ」
「全然関係ないしっ……」
「いやーでも馬あちゃる君もハイスペックさが売りなんでね、負けてられないですよこれはー！」
「ほんっ とにどうでもいいっ……！」
んっ
んっ
ずちゅっ
ぐちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ

「あー……でもとりあえず一回中に出しときますね」
「!? ちょっ」
「はいいきますよーはいはい」
「待ってダメー」
あっ
まっ
んぁ
んっ
ちょっ
パン
パチュ
パチュ
パン
ぱちゅっ
ぱんっ

「ッ！」
「んぅ、ほんと中にっ……」
ビュルル
ドクッ…

「フゥー……ウビバウビバ」
（なんとか今回も上手いこといきそうですねー。
よかったよかった）
ピクピクッ

「あーあ……。もういっかあ。私のせいじゃないし」
「……はい？」

「これで終わりなんて言わないよね？」
（……っ、足で抑えられて、動けない……？）
「裸のお付き合い、だったっけ。
じゃあ私にも付き合ってもらおうかなあー……♥」
「ア、アビバ……」
（背筋に寒気が……）

「え、や、ちょい、馬あちゃる君そっちの穴に興味は――」
「食わず嫌いはよくないよね♥」

「ウビバァッァァァ」
あー♥
「あー♥　ふとーい♥　かたーい♥」
ずーぷずぷ

(い、入り口部分の締め付けが……
あれ、出口か……?)
いいよぉ
あはぁ
「いいよお！　さすが馬のアレ」
「いや僕生身は人間なんすけどっ」

「とりあえずもう一回イっとこうか♥」
「ちょっキツ……ッ！」
あんっ
はっ
はっ
ジュポッ
ジュポッ
ジュポッ

「ほーらがんばって♥」
がんばれ♥
がんばれ♥
んっ♥
あっ♥
ぶちゅっ
じゅぷっ
ずぷっ
じゅぷ♥
じゅぷ♥

「――ウビバァッッ！」
ドピュッ
ビュクッ
ビュルルッ
ドクッッ

「すごいなーこれ。まだ固いし」
（まずいっすね……薬のせいでこれ、辛くても萎えないんじゃ……）
はーい
はーい
「当然、まだいけるんだよね？」
「いやあのですね」
「いけるよね？」
「アッ」
ピクピク

「実はアカリちゃんからも言われてるんだよねー。
馬にお灸すえといてー、って」
(あー……これはちょっと、生きて帰れるか怪しいっすね……)
「そーゆーことで。何か遺言ある?」
(死は確定事項っすか……)
「ないの?」
「あー……。それじゃひとつ……」

「今後とも、白ちゃんと仲よくしてくれると嬉しいです……」
「へー……そっか。なるほどねぇ……。
はい、ウケタマワりました」

「それじゃあ……長い夜になるけど、がんばってね♥」
「ウ、ウビバアアァ

END